

2024年6月2日

説教題「宣言 わたしはひとりではない」ヨハネによる福音書 16章 31～33節

主任牧師 加藤 誠

**「だが、あなたがたが散らされて自分の家に帰ってしまい、わたしをひとりきりにする時が来る。いや、既に来ている。しかし、わたしはひとりではない。父が、共にいてくださるからだ。」(ヨハネ福音書16章32節)**

先週26日の午後に開かれた新田義貴さんのウクライナ取材報告会は地域の方々と「平和」について共に考える貴重な機会となりました。講演後の質疑では「ウクライナもロシアもキリスト教国であり、聖書の『隣人を愛せよ』という教えに葛藤を覚えている人の言葉も紹介されていたが、人々はどんな思いで武器を手に行っているのか。その場合、聖書のどの部分が根拠になっているのか」という質問が寄せられていましたが、この問いは日本の私たちにもそのまま向けられている問いだと受け止めました。

少なくとも新約聖書には「武器を手にして戦争をする」根拠となる言葉はありません。主イエスは「敵を愛しなさい」とまで言われ、十字架の最後に至るまで「愛敵」と「非暴力」の歩みを貫かれたからです。弟子たちもローマ帝国の厳しい迫害を受けても武器をとりませんでした。ローマ帝国がキリスト教を国教化し、権力者とキリスト教会が親しくなって以降、国が戦争することの「正当化」が試みられていきます。

その代表的な考えに「二王国説」があります。「主イエスは神の国の教えを語られた。しかし神の国が実現していないこの世界では武器を取らざるを得ない場合がある」というものです。別の言い方をすれば、主イエスの「愛敵の教え」に「聴き従うべき領域」と「聴き従わなくてもよい領域」の二つがあるという考えです。例えばアメリカは、かつて「共産主義の悪魔と戦うため」という「正義」を掲げてベトナム戦争を始めました。「悪魔との戦いであるなら武器を手にして良い」というわけです。

一方、キリスト教徒が97%の小さな国、東チモールがイスラム教国のインドネシアから独立した際、大変苛烈な迫害を受け、東チモール政府は周辺国に軍隊派遣の要請をしましたが、その際、日本のキリスト者の中で「東チモールに自衛隊を派遣すべきか否か」の論争が起こりました。結論としては、「主イエスに従うなら自衛隊を派遣すべきではない」となりましたが、とても難しい問題だと思います。

わたしの現在の立場は、主イエスの教えに聴き従うべき領域と聴き従わなくてもよい領域を分けて、戦争を聖書で正当化することには反対。同時に、主イエスの教えを「こうあらねばならない」と教条的に受け止めて思考停止になるのも良くない…という理解です。というのは、主イエスは十字架を前に最後まで葛藤し血の滴るような祈りをされました。主イエスは暴力あふれる世界の中で「超然」としておられません。激しい葛藤を抱え祈られています。それゆえ、主イエスに従うキリスト者に求められていることは、「この場合は主イエスの言葉に聴かなくてもよい」と戦争を安易に正

当化することでも、「主イエスの言葉は絶対！」と教条的することでもなく、主イエスがゲッセマネで祈られたように、愛の神の教えと現実の葛藤の間で祈り続けること。その際、肝に銘じるべきは「暴力や武力は最終解決にはならない。新しい憎しみを生み出すだけ。神の愛のみが最終解決であり、私たちの間に新しい関係を創造する力である」という十字架の真理に立つこと。「敵を愛せよ」の「愛せよ」は「好きになれ」という意味ではなく「十字架の愛の神に委ねよ」の意味であること。この二つです。

さて、前置きが長くなりましたが、そのような葛藤あふれる世界を生きていく弟子たちに主イエスが語られた言葉に今朝は聴きたいと思います。「あなたがたは世では苦難がある。しかし、勇気を出しなさい。わたしは既に世に勝っている」（33節）という有名な箇所ですが、この「勇気を出しなさい」という言葉は、福音書で印象的に使われています。①運ばれてきた中風の人に「子よ、元気を出しなさい」（マタイ9・2）、②長い間出血に悩まされてきた女性に「娘よ、元気になるなさい」（同9・22）。いずれも「お前は神の恵みから落ちこぼれた！」と礼拝から排除されていた一人ひとりに主イエスは「安心しなさい。あなたに神の慈しみは注がれ、あなたの祈りは神にちゃんと届いている」と語られたのです。また③嵐の湖の上で漕ぎ悩む弟子たちに「安心しなさい。わたしだ」（同14・27）と語りかけられています。この世界で見えない神を信じて生きることは荒れ狂う湖の上を小さな舟で渡るようなものですが、主イエスは弟子たちの舟と一緒に乗り込んで「この荒れ狂う湖も神の慈しみの支配の中にある。あなたがたの戦いとわたしは共にある」と教えられたのです。つまり、この世界で愛なる神を切に求めながらも苦闘し、倒れそうになっている一人ひとりに主イエスが「宣言」された言葉が「勇気を出しなさい」という言葉であり、観客席から「頑張れ！」と叫ぶのではなく、同じフィールドに立ち「共にある覚悟」をもって語られた「宣言」なのです。なぜ主イエスは、そのように「宣言」できたのか。その根拠が32節に記されています。「あなたがたが…わたしをひとりきりにする時が来る。…しかし、わたしはひとりではない。父が、共にいてくださるからだ」。これは主イエスがたったひとり残された十字架の出来事です。愛する弟子たちに裏切られ、たったひとりで孤独で受けなければならなかった十字架。けれども主イエスはその十字架の上に「父なる神が共にいてくださる」ことを体験されました。あの十字架は、子なる神（イエス）と父なる神が一つになられた場所だったのです。十字架はこの世界のどんな暗闇の中でも主イエスが私たちと共におられ、私たちのために祈り、私たちを神の愛に結び合わせ続けてくださっていることの「しるし」（奇跡）です。暴力の嵐が吹きすさぶ世界にあって、十字架の主は「それでも私たちはひとりではない。父なる神が共にいてくださる」「安心しなさい。勇気を出しなさい。神の愛の中を歩みなさい」と私たちを励ましてくださる。この主イエスの言葉を聴き続けていきましょう。